
インセクトワールド

光琳寺 凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インセクトワールド

【Zコード】

Z9463C

【作者名】

沐浴寺 凪

【あらすじ】

今から数億年後、地球は大きく変化する。人類と昆虫一時合体、そして一時合体に必要な琥珀、インセクトストーンを巡る主人公「ライ」と一時変換装置の「ザック」心悪しき兄から一度破滅しかけた地球を守るためにライ達は旅に出る！

プロローグ

- 一億五万三十年後、全ての人類と共に、地球半滅亡。
- 一億六年後、地球が昆虫の星になる。
- 一億七万八千年後、哺乳類誕生。
- 一億十年後、突然変異により猿型哺乳類誕生。
- 一億五十年後、類人猿にちかいものへ進化。
- 一億百年後、人類に近いものへ進化。
- 一億二百年後、人類復活。地球は人類の星となる。
- 一億二百年後旧昆虫の琥珀（化石）を発見。DNA一時変換装置の研究が始まる。一億二百年後、DNA一時変換装置の完成。それと同時に旧昆虫の琥珀から昆虫のDNAを取り出す事が可能になった・・・

「ライ、インセクトストーンは渡してもうおつ・・・
・・・・」

そしてインセクトストーンは兄によつて盗まれた。

コツコツ・・・

「起きてる？ ラーイ？？」

バン！

勢いよくドアが蹴破られた。

「ら、ライ？？ど、どうしたのその格好・・・・」

「ちえ、チエチイ・・・・」

「アガーガー」

「ザック・・・・」

つと、ここいら辺で自己紹介！ オレの名前はライ！ 家には先祖代々伝わる昆虫の琥珀、一般的はインセクトストーンが伝わっていたんだけど・・・・兄さんに盗まれてしまつたんだ！ 兄さんはどこかの組織のボスをしていて、きっとインセクトストーンを悪用しようとしているにちがいない。しかし、一つ助かつた事がある。オレはこんな時のためにインセクトストーンを一つ、チエチイに預けていたんだ！

で、まあそのチエチイなんだが、まあ説明はオレの幼なじみだつて事くらい。そしてザック！ ザックはチエチイのペツトなんだぜ！ そしてインセクトストーン！ こいつは前で言つたとおり、昆虫の琥珀なんだ！ しかも琥珀は琥珀でもDNAの取れる琥珀なんだ！ 普通、琥珀の中の物は圧力がかかつてゐるため、DNAが崩されてしまつているんだそうだ！ しかし、数万個につ、DNAの崩されていない琥珀があるんだ！ その琥珀のDNAを一時変換装置で読み込む！ すると自分どそのインセクトストーンの住人が合体する。

しかしインセクトストーンの住人には意思（息すら無いが）が無い。つまりは自分の意思で動かせるってことさ！

と、一つ言い忘れがあった！一時変換装置には一つ種類が有つて、意思の有る一時変換装置と、意思の無い一時変換装置があるので！で、ザックも実は一時変換装置で、種類は前者の方だ！と、いつてもまだDNA変換はしたことがないがね！

と、まあ自己紹介はこの辺にして、本題に入りたいと思つ。

オレは兄さんに盗まれインセクトストーンを取り戻さなければいけない！でないとこの世界・・・・いや、この星が危ない。一度滅びかけたこの地球に次はないだろう。

「ライ、インセクトストーンを取り戻しに行こう！」オレから話を聞いたチエチイは言った。

「チエチイは来なくていい・・・・そのかわり、ザックを貸してくれないか？」ハツキリいって、インセクトストーンを持つていらないチエチイは戦力外、すなわち足手まといだ！チエチイの気持ちは嬉しいが、チエチイを危険な目に合わせるわけにはいかない。

「分かったわ・・・・」チエチイは残念そうに顔を伏せた。

「ザック・・・行こう」

「あ、アグウ～～」なんだかザックは淋しそうだ。

「絶対に・・・死なないでね」

「お、おう！」そして、オレ達の旅は始まった・・・・

オレ達が旅に出て今日で二日目、そろそろ食糧の尽きかけている
なか、インセクトストーンはまだ一つ、テントウムシの石のみ・・・

・「おまえがライだな！」

「誰だ！？」

オレが声のした方を見ると、一人のリーゼント男がいた。

「オレの名前はリーゼント太郎！おまえの兄さんの命令でテントウ
ムシの石を回収に来た！」

「なぜテントウムシの石が必要なんだ？インセクトストーンにはカ
ブトムシやクワガタの石も あつたらついに！それがあればこんな雑
魚石いらないだろ？」

「ガリレイ様はテントウムシの石を回収して来いとおっしゃつてい
た、オレはそれに従うまで！」

「どうか、兄さんはガリレイと呼ばれているのか・・・

「早速だが、交渉しないか？ガリレイ様はお優しいお兄様なのでな
るべくあなたを傷つけないようになるとおっしゃつておりました。なの
でテントウムシの石を渡して貰えませんか？」

「へつ！やだね！兄さんにわたるくらいなら今すぐ壊したつていい
！」

「分かりました。素直に渡していればなにもしなかったのに・・・

「

「いくぞ！ザック！！」

「アグウ～～！」

そう言つとザックはオレの手からテントウムシの石をもぎ取り、
飲み込んだ。すると、いきなりザックは光り始めた・・・気付く
とオレの手にはザックの顔が着いていた・・・

それはアローだ！

頭の中に誰かが呼び掛ける。

頭でアローを撃てと命じれば自然と放つ！また会おう！

それから謎の声は聞こえなくなつた。

「ふ、所詮はテントウムシの石、しかも一部組み替えか、はははは

！死ぬがいい、ガリレイ様のにつくき弟よ！！」

そう言つとリーゼント太郎はリーゼントの中からなにかの装置を取り出した。そしてリーゼント太郎は光だした。

「ははは！これぞ完全変換！トンボの力を最大限まで引き出してやつたんだ」

そう、ライの田の前にはリーゼント太郎の姿はもつ無く、代わりにトンボの姿をしたリーゼント太郎がいた。

「か、勝てるのか？こんな奴に・・・」

「どうだ、怖じけづいたか！今なら命は助けてやるぞ？」
「へ、誰が怖じけづいたつて！？」

撃て、アローをリーゼント太郎の羽を突くんだ！
ビュン！！

突然ザックの口が開き、アローが飛び出した。

「いっけええええ！」

「ふ、その程度の弓・・・・パラリンボム！」

ドカアアン！！

アローはリーゼント太郎の攻撃、パラリンボムにより呆気なく粉
碎された。

どうすれば・・・・

目だ！

「えつ！？」

奴はトンボ、目を狙つてアローを放てば奴にはそれがいくつに
も見える！

でももうアローは粉碎されてしまった。

DNA一時変換装置はまだ生きている。一度変換を解いてまた
変換すればいい。

そうだつたのか、なら一度変換を解こう！

「弓をまた取り戻したか、だが勝てるかな？パラリンボム！」

ドカアアン！！

しゃがめ！

オレは謎の声に従い間一髪パラリンボムをかわした。

「今度はこっちのばんだ！」

アロー！リーゼント太郎の目を射るんだ！

オレはアローをリーゼント太郎の方向に向けた。

キュイイイン！

わざわとは違ひ音がした。

アローは真っ直ぐリーゼント太郎目掛けて飛んでいる。

バーラリンボム！！

トカラアン！

誕生日！あと一歩たったの？

何かあと一步ですか？あの片なら自分で放った爆発で倒れてしまよ？

その横にはトジボの石!

「あつた、トノボの石だ！！

「アグウウ！！」

「ザック、やつをば！」
いつの間にか変換は解けていた。

ガサガサ

「誰だ！？」

「！」、「こんにちは！ぼ、僕、シメジと申します！」
「なんと、現れたのは巨大なキノコに手、足目、鼻、口を付けたよ
うな生物がいた。
「あ、あのおぼ、僕をあなたたちの仲間にしてくれませんか？」
「兄さんの手下じゃないのか？」
「じ、実は僕ガリレイ様から逃げて來たんです！」
兄さんの元から逃げて來た？
「なぜ逃げて來たんだ？」
「ガ、ガリレイ様は僕をた、食べようとしたんですね！」
「…………」
オレは兄さんの思考を疑つた。
「まあいい！兄さんの元にいたんだからインセクトストーンと一時
変換装置は持つてるな？」
「いえ、僕は人間と違つて変換しなくても十分戦えるので貰つてな
いです」
「そうか、こいつが一つでも持つていればよかつたのだが……。
「まあいい、で、なんて名前だっけ？」
「シメジです」
「そう、シメジさあ！なんかインセクトストーンに関する事とか聞
いてない？」
「よ、呼び捨てですか！？ま、まあそれで僕が知つてているのはガリ
レイ様からインセクトストーンを持たされるのはガリレイ様に洗脳
されて裏切れないようにするんだ！」
「せ、洗脳！？」
「見つけたぞう～～！」
不意に頭上から声がした。
「誰だ！？」

ドサッ

上から黒い物体が降つて来た。

「す、スペイツシユ！」

「スペイツシユとはなんだい？」

「スペイツシユはガリレイ様の護衛をしている蜘蛛さー！きっと僕を殺しに来たんだ！」 「オレが助けてやる！ザック、行くぞ！」

「アグウ！」

「お前の石の討伐は命じられていなかつたが、飛んで火に入る夏の虫にならないようにな！」

「僕だつて・・・僕だつて、やるんだ！！ホーバークステイ！！」

「！？」

いきなりシメジの身体が光り始めた。

ボン！！

シメジが爆発した！？

すると、煙の中からは小さなキノコが・・・

「行け、パサラ達よ！」

それを合図にキノコ達は一直線にスペイツシュを襲つた。

「そんなキノコどもにこのスペイツシュ様がやられるとおもつたか

！！」

今までスペイツシュを襲つていたキノコ達は、あつといづ間に蹴散らされた。

「今だ、お願ひします法師（胞子）様！」

すると、シメジの頭から胞子らしき物が一気に放出された。

そしてその細かい胞子はやがてくつき始めた。

「ほほほほほ、我こそが胞子族唯一の法師、キノコ リンリンなるぞ！」

周りの胞子とくついた法師は、手、足、目、口が付いていた。

「ふ、どんな奴を使つたって勝てないぜえ～」

そう言つと、スペイツシュはするすると木の上へと登つて行つた。

「逃げる気か！？」

キノコ リンリン様が後を追つ

「アップルオレンジグレープ」

木上からスペイツシュが果物の名前を唱えた瞬間、急に木からアップルとオレンジとグレープが一気に降つて來た。

「いててててて！！」

キノコ リンリン様が喘ぐ。

「しゃせんこの程度か」

木の上から見下したようなスペイツシュのこえが聞こえた。

「ま、負けるか～～～」

シメジがキノコ リンリンと一緒に叫ぶ。

すると、シメジが輝きだした。

「な、何だ！？」

ライとスペイツ シュがはむる・・・・・

「ウオ――――！」

離れてみているライは、その迫力に驚いた。

「くらえ！！」

キノコ リンリンが手をかかげる。

「う、うわ～～～～～」

木の上から、スペイツ シュの悲鳴が聞こえた。

「やつた！勝つたぞ！..！」

「え？」

盲点だ！

またもや恒例の謎の声がやつて來た。
あの技は盲点に入るんだ！

盲点？

盲点とは眼の中にある場所でな、そこに像が結ばれると見えなくなるんだ！それをあの技は使っている！！
ところで今までずっと氣になつてたんだけどあんたつて・・・・・
だれ？

・・・・・直に分かるだろ？！

そして謎の声は消えていった・・・・・

「ライ？」

シメジの声でライは我に返つた。

もう既にキノコ リンリンはいない。

「さ、行こう」

「どこに？」

「オレの兄さんの所さー案内してよー」

「・・・・・うん！分かったよーライとなつきと・・・・・」

シメジを仲間に加えオレ達はシメジに案内されて、イノセントパレスという所へ向かつて行った。

「なあシメジ、一体いつになつたらそのイノセントパレスとかいう所に着くんだ？」

「まだまだ！でもイノセントパレスにはインセクトストーンが一杯保管されてるんだ」一杯ねえ………いくら一杯といったって世界にはインセクトストーンが千万個あると言われてるんだ、どうせ兄さんはそんな石には興味がないのだ……きつと。

そう、兄さんが欲しいのは……

「危ないですよ！」に、してもどうしましよう……

シメジに話し掛けられ、オレは我に返つた。

「なんど、あと」三歩くで深い亀裂に真っ逆さまだつた。「さ、サンキューな、シメジ……」

「べ、別に御礼はいいですけど」れじやあ先に進めなによ」どうすれば……

ザックにテントウムシの石を使つんだ！

しかしそれはアローでは？

完全融合するんだ！

か、完全融合！？

リーゼント太郎を覚えてるか？

ま、まあ……

あいつはトンボの石と完全融合していたんだ！

ならトンボの石でもいいじゃん！

いや、トンボの石は後で使うから今は使わないほうがいいだろ

う……

なんで？

実は同じインセクトストーンを二回連続して使うと、ランクが

下がつてしまふんだ！

ランケ?

まったく、インセクトストーンを受け継ぐ家系のくせに全く知識が無いんだから困ったもんだ・・・・ま、ランクとはインセクトストーンのパワーを示すもので、強ければ強いほど数字は高くなる。ちなみにテントウムシの石は最低ランクの1だ！そしてトンボが4だ！まあそれは今のランクだから上がったり下がったりするがな！どうやってランクを上げるの？

どうやってランクを上げるの?

ランクを上げるには相手のインセクトストーンを戦いで粉碎しなければ上がらない。下げるには連續変換、完全融合の極度解禁、長時間に及ぶ変換などと、下げる方法は皮肉な事に五万と有るのさ！

そうだ、これは絶対にやるなー!ランクが下がるだけじゃなく、命まで危険になるからな!

卷之三

完全融合の極度解禁は完全に昆虫の力を利用出来るようになるんだ！しかしそれは昆虫になつたも同然！意識が吹っ飛んで暴走しちまう！ま、それは一部のDNA変換装置でしかできないから恐らく大丈夫だろう！

の
?

ただ完全融合するぞ！って思つていれば出来るけど？

あ
あ

そういえばこの前誰つて聞いたら後に分かるとか言ってたけど全然分からんだけど・・・

いや、絶対に後に分かる！なので今はこれだけ……私はキラ、覚えておけ！それじゃあまた、……

キラ、キラ、killer、殺し屋・・・

いや、今はそんな事を考えないで完全融合だ・・・

「ザック！」

そう言つてオレはテントウムシの石を掲げた。

ガブリ

「完、全、融、合、～、～、～、～！」

そして目の前が真っ暗になつた・・・

気付くと、オレはテントウムシになっていた。

「ら、ライ・・・・？」

シメジが尋ねてきたが、オレは声が出なかつた・・・・・
しかたがないのでオレはシメジを掴んで亀裂の向こう側へ飛んだ。
向こう側へ着くと、オレは変換を解いた。

「い、今のは何？」

「テントウムシ」

「そ、そりゃなくてライがなんで・・・・・？」

「うーん・・・・・オレにもよく分からぬけど完全融合とかいう
感じよ」

「ふうん・・・・・」

「ま、行こうぜ！」

その時、オレは妙にだるかつたが、そんな体を動かした。

「こいだよ！」

なん時間もかけてたどり着いたその場所は、ただの古いお屋敷だ
つた。

「こ、こいが・・・・？」

「そ、こいがイノセントパレス！」

「誰だ！？」

イノセントパレスの扉を開けるといきなり声がした。

「そつちこそ誰だ！姿を現せ！」

「コッ、コッ、コッ・・・・・だんだんと足音が近づいてくる。

「こんにちは私はナオ、ヨロシク」

「よ、ヨロシク・・・・・」

そこから現れたのは小柄な若い男だった。

「で、何の用だ？」

「インセクトストーンを渡してくれ」

「あなた方は組織の方ですね？」

「違う！」

「違くない！最近組織の行動は分かつてているんだ！」

「オレ達はそんなんじやない！」

「信じられない！勝負しろ！」

「え、ええ～～～～！」

「うを～～～～！」

「小柄な男は光りだした・・・完全変換だ！」

「やめろ！」

「完、全、変、換！～～～～！」

「まで！」

上から聞き慣れた声が聞こえた。

「ナオ、この方達は悪い奴らじやない！」

「そ、そつなんですか？」

「ああ」

間違いない、これは謎の声、キラの声だ！

「キラさん！こんなにちは、いや、始めまして！」

「あ、あのぉ～誰？」

キラの声を聞いた事が無いシメジが戸惑う。

「始めて、シメジ君！」

そう言ひとどサリといつ音と供にキラが落ちて來た。

オレもキラの姿を見るのは初めてだ！キラさんの第一印象は背がもの凄く高い。恐らくは一メートルちょい位はあるだろ？。髪は茶髪で耳にはたくさんのピアス。そして顔にはキラだけあって傷だらけだ。

今キラさんがシメジになぜオレがキラさんの事を知っているのか

説明している。

説明を聞き終えたシメジは深刻そうな顔をしている。

「シメジ、どうしたの？」

「今からこの俺、キラを仲間にしないか？」

シメジでなくキラさんが先に言った。

「べ、別にいいですけど・・・」

「そうか、ありがとう！ 実は先日俺の部下が一気におまえの兄さん

に殺されたんだ。だから残るはナオ一人、俺は部下の仇をうつ」

「兄さんめ、関係ない人まで・・・」

「いや、関係はある。恐らくおまえの兄さんはインセクトストーン
が狙いだと思づ」

「やつぱり・・・」

「しかしここにあいつの欲しいインセクトストーンはなかつた」

いくら悪者でも自分の兄をあいつと言われるのは気分がよくない。

「あいつの狙いは君の持っているテントウムシの石だ！」

リーゼント太郎の言葉が頭の中でリフレインする。

「では、いつてらっしゃい！」

イノセントパレスには留守番としてナオが残る事になつた。

「お、重いよお～～！」

イノセントパレスにあつたインセクトストーンを乗せたりアカー
を引くシメジが嘆く。

「この調子なら兄さんを倒せるかもしれない。

伏せろ！」

急にキラがテレパシーを送つて来た。
横を見るとシメジは既に伏せている。

シユツ！

オレの右肩を「か何かがかすつた。

「あああ、外しちゃつたあ～・・・」
「誰だ！？」

「チャオ！ オレッち『チヨン』ってんだー。よろしくねー。」
オレの前には右腕にボーガンを持った少年が居る。

「なんだ？」

「ガリレイ様の命令で……」

「もういい！ そこまで聞けばもう分かるから」

「…………あそ」

「まあいい！ 勝負だ！」

「下がれ、一発で仕留める」

キラさんが前に出る。

「完全変換！」

キラさんはカマキリの石をした用だ！ 姿がカマキリになつてい
る。

ザシュン！

オレの田の前を一瞬の風が通る。

田の前には変換を解いたキラさんと倒れているチヨンがいる。
「死んでるの？」

オレはもしチヨンをキラさんが殺したならばこれで手を切るつも
りで尋ねた。

「いんや、気絶させただけだが？ まさかキラをキラーと勘違いして
ない？」

「します」

「キラは如月等印の頭文字セー。」

「なるほどー！」

不意にシメジが声を上げる。

「お前の兄さんのアジトについていたが」

あれからオレ達は一、三時間歩き、ついに宿敵の兄さん・・・いや、ガリレイのアジトへ辿り着いた。

「懐かしい」

シメジが和んだような声を出したが顔は緊張で張り詰めてたいんだ
だいる。

「でもこんな所がアジトなの？」

そう、ガリレイのアシトはホームレスの家のようなフルーシート作りであつた。

「中、開けてみな！」

「…」シスジが一矢を射したかと思ふと、

中には穴が開いていた。

今オレ達はあの穴に落ちている。

ホーリー・ソング

落ちた先は薄暗い部屋はあるトコホリ、が、が

暗がりから響かしハ声
が・・・・ガリレイだ!!

「勝負だ！ ガリレイ」

「………」セシルが尋ねたが、我が弟

「お前がテントウムシの石をくれたら私が盗んだ石は全て返そう」

「興味があるのか」

「見てくれたまえ！」

あれからオレ達はガリレイに無理矢理連れて行かれて今、広い何やら機械的な部屋にいる。

「これがお前のたくらんでいるものなんだな？」

「素晴らしいだろ？これは新型のDNA変換装置でな、あとテントウムシの石があれば完成するんだ！これが完成すれば普通のDNA変換装置にあるバグだつて修復出来る！そして皆が安全にインセクトライフを楽しめるんだ。だから私にテントウムシの石を譲ってくれないか？」

オレはガリレイが悪い事を企んでいるからオレのテントウムシの石が必要なのかと思っていたし、家からインセクトストーンを持ち出したのだつてそのためだと思っていた。しかしガリレイが皆がのためを思つてやつていたとは・・・

「分かつたよ、ガリレイ・・・いや、兄さん！」

そしてオレは兄さんにテントウムシの石を渡す。

「ありがとう、我が弟よ！」

そして兄さんは装置にテントウムシの石を入れ、その装置へ乗り込む。

「後は、人間があれば完成だ」

急に兄さんの様子が変わつた。

「まんまと騙してくれたな！」これで世界征服なんぞ朝飯前だ！おつと、後は人間が必要だつたな・・・

オレを使う気か？

「これが誰か分かるかな？」

そう言つと兄さんの乗つている装置の蓋らしき物が開いた。

「・・・チエ、チエチイなのか？」

そこにはぐつたりとしたチエチイの姿があつた。

「こいつが装置の原動だ！助けたかつたらこの装置を倒す事だな！ま、一つ情けとして言うが一時間もすれば彼女は死ぬ！一時間でこの装置は奇跡でも起きない限り倒せない！潔く諦めて帰つた方がいいぞ！私が世界征服したらお前達は楽な生活を保証してやる！だから・・・邪魔をするな！！」

「ふざけるな・・・チエチイは、チエチイは・・・オレの友達

だあ
！
！
！
！
！」

「俺も、部下の仇を伐たないといけないしな！」

「ぼ、僕も奇跡に賭けてみるよ！」

「哀れな奴らだ！私に刃向かうなら……殺す！」

タイムリミットは後一時間、一時間で絶対兄さんを倒す！！

「チエチイ、待ってるよー！」

そう呟くとオレは適当にシメジの持つリアカーからインセクトストーンを取り出す。

「「完全変換！」」

キラさんと同時に完全変換する。

キラさんはカミキリムシ、そしてオレは・・・・・ゴキブリだ。ライ、今変換を解いてる暇はない！あの女が死ぬまではあの装置はまだ完全じゃない、つまりはまだ倒せる可能性があるんだ！

「ジードキヤノン！」

シメジも参戦してくれるようだ。

ズババババババ

シメジの手に急にキヤノンが現れ玉が出る。

オレ達も行くぞ！

了解！

「兄さん、覚悟しろ！」

オレは装置に体当たりする。

「利かないぞ、そんな技・・・・」

機械を通して兄さんがオレに向かって言つ。

「ライ！技を使うんだ！」

そういうてキラさんは目からレーザーを出す。

ガリガリガリッ！

装置から火花が飛ぶ。

「すごい！でも技ってどうやって出せば・・・・・・

「今からインセクトストーンに入っている技データを転送する！」「お願いします！」

しかし何故さっきから兄さんは動かないのだろうか？

「よし、転送したぞ！」

そう言われたとたんに田の前が赤に染まつた。

『ゴキブリの石 ゴキブリ亜田型。技・・・スケールスピード』時速三百キロで走る事が出来る~クローズライフ~戦いで負けてもこの石は破壊されない~ピックイースト~敵にウイルスを送りつけ攻撃する~』

なるほど、今はピックイーストを使えばいいわけか！

「くわいえ！」

「そろそろ・・・・行くかな？」

不意に兄さんの乗つた装置が動き出した。

「ヘラクレス！」

兄さんの声が聞こえたと思つと田の前には黄色に黒の細かい斑点があるカブトムシ・・・・カブトムシの中でも九ランクに位置するらしいヘラクレスオオカブトが現れた。

「こいつはやばいぞ！」

「どうすればいいんですか！？」

「焼きマツタケ！」

シメジが意味不明な事を言つた。

ボワン！

謎の音とともに煙幕とマツタケのいい香り・・・・つまりは焼いたマツタケを出現させた訳か！

ジユボッ！！

ヘラクレスオオカブトのケツに火が移つた。

「使えん・・・・行け！ズズメバチ！」

またもや強敵・・・・

「く、やばいぞ！」

キラさんもそろそろこのスタイルじゃあ勝てない事を感じたようだ！

変換を一端解こう！

分かりました！

「「完全変換！…」」

今度オレ達は一人そろってカマキリになつた。

「やつ来たか、では・・・・・」

一きなり目の前で爆発が起きる。

「爆弾虫だ」

「爆弾虫？」

爆弾虫、聞いた事も無い虫だ！

「ロロロロロロ」

おぞらしく爆弾虫の鳴き声が聞こえる。・・・・ビリリ

る？

バン！！

またもや田の前で爆発が起る。

「どこだ！？」

おそらく爆弾虫とは体内で何かしらの反応を起こして爆発を起す蟲の事だろう！昔爺ちゃんそんな虫の話を聞いた覚えがある！爆発つて事は虫になつていたら焼け死んじゃうんじゃないんですか？

よし、完全変換はやめて半変換にしよう！

半変換？

テントウムシの石で言えばアローの変換の事だ！

分かりました！

「シメジー頼む！」

「分かりました！」

一瞬で何かを判断したのだろう！シメジはオレ達の周りを集中的に撃つてオレ達に爆弾虫の攻撃が当たらない様にする。

「そんな事をしなくたつてこっちから姿を現してやるべー！」

なぜそんな自分にとつて不利な事を？

「もつとこの戦いを楽しみたいからなーーー！」
なるほど、兄さんらしい考えだ！

オレ達は同じじくカマキリの石を使つて半変換をした。そして武器はカマキリだけに鎌だ！

「！」、「こんなんじゃああの装置まで直接ダッシュで近づかないじゃないですか！」

「大丈夫、これからは衝撃波、それからは大量の水が出る様になっている！」

「まるでロックンですね！」

「今はそんな事を気にしている暇は無い！行くぞ！」

「はい！」

「よくやったな・・・・まさか！」この装置が壊されるとほ思ひもしなかつたよ！」

「へ・・・・どうだ！・・・・」

「だが・・・・これで終わりだ！乐しかったぞ！我が弟達よー！」

そうして兄さんは装置についているハンマーのようなものを動かしたようだ！

ズドン！！

重たい音がしてそれが落ちてくる・・・・もつオレ達には逃げる力など到底無い。

「しねええええ！」

兄さん、あんたの事は死んでも恨み続けるぜー！それからチエチイ・

・・・助けてやれなくて・・・・・ゴメン！

「・・・・」

オレは・・・・生きているのか？いや、兄さんの乗つている装置が上から見えている。つまりオレは死んでいる！

「ラ・・・・・ライ」

キラさんが何故かオレの名を呼ぶ。

「何故だ・・・・何故だあああああ

何故兄さんは絶叫しているんだ？そつにえはせりから体が重た
い・・・・・

「ん？」

何故かオレは六本の足がある。

「チエ、チエチイ？」

オレの背中の上にはチエチイの姿が・・・・・そうか、オレはとつ
さに変換していたのか。

「ライ！早く降りてきて変換を解け！死ぬぞー！」

何故だ？ そういえば段々体が重たく・・・・・

そしてオレは再び意識を失った。

「大丈夫か？」

ハツ！？「」はぢはぢだ？ そういえば今兄さんの声を聞いたような・
・・

「ライ！」

キラさんの声だ！

「お、おきてくれよう〜〜」

シメジ・・・・・

「あぐう〜〜〜」

ザックカ・・・・・

「起きなさい！ライ！起きないと・・・・・起きないと！〜〜〜
バシッ！」

頬に痛みがある。チエチイ、よくも叩いたな！

そして今度は頬に熱い線が・・・・・

「皆・・・・・」

オレは皆の姿を確認した。

「あれほど極度解禁はよせと言つたるうが！」

キラさん・・・

「旨」

そこでオレはさつきの熱い線の正体を知った。

「すまなかつた・・・ライ」

兄さん・・・

「ライ、大好きだよ！」

チエチイが思いつきり抱きついてきた。

あれから八年の時が経つた。

「行くぞ！ ザック」

今オレはインセクトポリスと言つ警察のよつな仕事に就き地球の治安を守つている。

仕事が終わり家に戻ればチエチイが旨いご飯を作つて待つてくれている。

「まてえ～」

そしてまた同じ事の繰り返し・・・・・

こんな暇な毎日をオレは楽しんでいる。あの時を思い出しながら・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9463c/>

インセクトワールド

2010年10月20日19時53分発行